

<論文>

「真実」の転移と新たなリアリティ ——南部スーダン、ヌエル社会における 「予言の成就」の語りを事例に——

橋本 栄莉*

要旨

2010年11月現在、一国の独立を決める住民投票を控え、南部スーダンの住民の間では徐々に期待と緊張が高まってきている。度重なる内戦や平和構築、今回の住民投票を含む民主化への動きなどさまざまな出来事を経験してきたナイロート系牧畜民ヌエル（Nuer）の一部の人々の間では、それらの出来事はある予言者によってかつてなされた予言が「成就」したものであると語られてきた。本論の目的は、ヌエル社会において人々の歴史観や未来観と不可分に結びついてきた「予言の成就」に関する語りに注目し、新たな歴史的出来事を通じて刷新され続ける予言のリアリティのあり方について考察することである。本論では予言や予言者を取り巻く周囲の人々の語りが、各々の経験や偶然的な出来事を組み込みながら、特定の語りの要素を結節点としてゆるやかな「原因」と「結果」の関係で結ばれ、複数の人々にとって「真」たりうるストーリーとして重層性を帯びてゆく様相を明らかにする。

キーワード：歴史観、語り、真実性、予言／預言、スーダン

目次

- I はじめに
- II スーダン国家と「ヌエルの予言者」
 - 1 植民地行政と予言者
 - 2 内戦から「平和」構築の時代へ
- III 「予言の成就」と新たなリアリティ
 - 1 予言者ングンデン
 - 2 繰り返す出来事
 - 2-1. パディンの戦いを語る人々
 - 2-2. 予言者討伐のゆくえ

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

2-3. 民主化へのまなざし

IV おわりに：「予言の成就」の枠組み

I はじめに

スーダン共和国で勃発した第一次・第二次内戦（1955-1972, 1983-2005）、SPLA（スーダン人民解放軍）の内部対立（1991-1999）やその後の平和構築の過程において、ナイロート系牧畜民ヌエル（Nuer）社会で霊的な存在とされてきた予言者¹（*gok, gwan kuoth*）や予言に関する噂は、民族集団の境界を越えて広く流通し、多くの人々の言動に影響を与えてきた [e.g. Johnson 1994; Hutchinson 1996]。内戦以降、各国から多くの援助団体が進出し、半世紀の間に劇的な変化を遂げたスーダンは2010年4月の総選挙、2011年1月の住民投票と新たな変化の過渡期にある。こうした大きな社会変化の中で、人々はどのようにこれから訪れるであろう「未来」を語り、内戦などの「過去」を位置づけ直してきたのだろうか。本論で注目するのは、ヌエル社会の歴史観の形成において、特に重要な役割を果たしてきた予言者ングンデン・ボン（*Ngundeng Bong*、以下ングンデンとする）によってなされたという「予言の成就」に関する語り²である。彼の予言は、植民地支配、内戦、民主化といったスーダンの歴史的変遷を理解するすべとして今なお多くの人々によって語り継がれている。

本論の目的は、ある「予言の成就」の語りがどのように世代を越えて説得力を持ちうるのかに注目し、語りを通じて刷新され続け、流通してゆく予言のリアリティのあり方を明らかにすることにある。具体的には、3~4世代にわたって受け継がれてきたヌエルの「予言の成就」に関する語りを事例に、その語り継ぎのプロセスと新たな歴史的出来事との関係を追ってゆく。

これまでの東アフリカの牧畜民研究において、予言者や霊媒師などは当該社会の宗教的世界観の一端を担うものとして、その社会的役割や政治的機能について分析されてきた

¹ 「予言者 (prophet)」という表記について、「神の告示の代弁者」というよりも、「未来を予測する」能力が強調されることから、「預言者」ではなく「予言者」とした。しかし、この表記の問題自体、興味深いトピックでもある。「預言者」というと、よくムハンマドやイエスといった大宗教の「メシア」とされるような人物に用いられる表記である。ヌエルの予言者をめぐる諸「信仰」はイスラームやキリスト教のメシア思想と不可分に結びついている。ヌエルの予言者に関する日本語の記述を見ても、「預言者」と表記するもの [栗本 1999; 栗田 2001] と、「予言者」と表記するもの [長島 1978] とがあり、その区別は難解なものとなっている。ヌエル語では、予言者はグック (*gok*) やグワン・クウォス (*gwan kuoth*) とされ、それぞれ「(クウォスのつまった) 皮袋」、「クウォスの持ち主」の意味がある。

² 本論で取り上げる語りは、植民地行政官による記録や、歴史学者によって収集された歴史資料に依っている。

[e.g. エヴァンズ=プリチャード 1940(邦訳 1978); Lienhardt 1961; Beidelman 1971]。このような研究においては、予言者の性質や立ち振る舞い、社会への参与の仕方などが主な問題とされ、初期の人類学研究に多くの理論と事例を提供した。しかし、これらの研究は植民地状況という当時の文脈を無視し、当該社会をあたかも「歴史のない社会」³であるかのように描いていると批判されることになる [e.g. Arens 1983; Hutchinson 1996]。そもそも、「予言者／預言者」という語は、当該社会のシャーマン、雨乞い師、占い師、呪医などの霊的な能力をもった何者かに対して植民地行政官や研究者などによって貼り付けられたものであった [Anderson and Johnson 1995: 2]。つまり列強による植民地支配は、東アフリカ社会において「予言者」が誕生するきっかけの一つであったともいえる⁴。

そこで、静態的な社会のモデルを抜け出すために社会変化の動態の中でこれらの事象を捉え直したのが、植民地支配期に生じた在来のリーダーを奉った抵抗運動に関する研究である [e.g. バランディエ 1983; Lan 1985; Middleton 1960]。抵抗運動の中で各地の在来のリーダーとされる人物は、人々を運動へと動員する大きな力となって出現した。それらの運動を植民地政府の支配に対する反作用として捉えるという視点は、これまで「閉じた」社会の宗教とされてきたものを西洋との接触の関係で見るという新しい視座を提供した。バランディエ [バランディエ 1983] は、中央アフリカのコンゴ共和国で発生したメシアニズム運動に注目し、植民地状況と不可分に結びついた運動としてこれを捉えている。コンゴに設立されたキリスト教教会を通じて組織されたこの運動は、親族集団や行政的・政治的区分を超えて展開し、人々は「コンゴ族統一体」を作ろうと民族集団の境界を越えた「文化モデル」を打ち出した [バランディエ 1983: 16]。バランディエは、この抵抗運動の主体は「植民地支配に反対するという形でしか再構築できなかった共同体であり、そのために特有の伝統的な『表現』が用いられた」と指摘している [バランディエ 1983: 326]。

これらの研究は当該社会における予言者を奉ずる運動を植民地期という大きな歴史的な文脈において捉え直すことに成功したが、どのようにして予言者の力がその周辺にまで及び、集団を超えた運動に派生しうるかという点に関しては議論が十分ではなかった。その点で、これまでの研究は「伝統的指導者」や植民地支配によって発見された予言者を基軸に社会変化と「伝統」のあり方について相関関係を見出そうとする、いわば「予言者」偏重の研究であったと言えよう。こうした見方は、植民地政府に抗する指導者を中心にまとめた当該社会として対象を一枚岩化してしまい、西洋対非西洋という二項対立図式の中に対象を埋め込んでしまう可能性を孕んでいる。確かに予言者は社会変化の象徴であったかもしれないが、そこで予言それ自体がいかに変化しているのか、予言者を囲む人々がどのよう

³ 川田は、無文字社会の歴史表象について、当事者と局外者との間にある「歴史」の意味の隔たりが「歴史」の主観性と客観性を隔てている、と指摘する [川田 2004: 17-19]。

⁴ 東アフリカの植民地状況で、在来のリーダーが抵抗運動の際に徐々に「予言者」のようになり台頭してゆくプロセスについてはラン [Lan 1985] を参照。ヌエルの予言者に関しては第二節を参照。

にそれらを「正しい」ものとして語り継ぎ、またより多くの人々がその言説の「正しさ」をどのように受け入れてゆくのかという過程は明らかになってこなかった。

一方で、歴史学では予言自体の解釈の変遷と持続という側面に注目する視点が提起されている。歴史学者の D.アンダーソンと D.ジョンソンは、予言者や予言が時空や世代を超えていかに影響力を持ち続けているかということに着眼し、当該社会の詳細な歴史資料や口頭伝承から予言を取り巻く現象を包括的に理解しようとした [Anderson and Johnson (eds.) 1995]。これらの研究者は、予言に関する語りの中に共通して現れるある特定の表現やいい回しによって、一見異なるように見える出来事を共通の枠組みで人々が解釈できるようになると主張する。こうしてイディオム化した表現は新しい出来事や異なる宗教的なイディオムにさらされる度に変化し続ける。このように彼らは人々が語る予言や予言者は様々な宗教的・社会的要素の共存状態を前提としていると指摘した上で、予言に関する語りや予言者を「伝統」の持続と変化の両側面を持つものとして捉えようとする [Anderson and Johnson (eds.) 1995: 14]。そして人々による予言の解釈も固定的なものではなく、流動的な社会の変化と「伝統」的要素の持続の中で捉え直そうと試みた。

彼らは社会変化の中で予言を適宜流動的に捉えようとする周囲の人々の姿や、人々の不安や期待といった感情と密接に結びついた予言についての語りの重要性を指摘し、従来、予言者を中心に描かれてきた社会変化とは異なる視点を提供してくれる。彼らが試みた予言的要素と社会の変化との関係、あるいは「伝統」の持続、そして出来事の再構成に注目するアプローチは、これまでのアフリカにおける予言者偏重の研究を乗り越える端緒を与えてくれる。このアンダーソンとジョンソンの試みのように、研究対象を予言者から予言の内容、予言を語る人々の心的状況へとずらしてゆくことは、複数の歴史観の様態を明らかにしようという試みでもある。しかし、複数の歴史観があることを主張するだけでは、その予言が当事者にとっていかなるリアリティとして立ち現われ、社会変動すら引き起こしうる力を生み出すのかは明らかにならない。重要となるのは、時空を越えて「真実」として顕現し続け、多くの人々が「腑に落ちる」ような語りの語り継がれ方である。

ここで、人々による語り継ぎのプロセスの重要性を示すために、浜本 [浜本 2007] の「真理化のプロセス」という観点を援用してみたい。「真理化のプロセス」とは、ある観念が特定の社会空間において「真」として流通する特定のプロセスのことを指す [浜本 2007: 31]。彼は「特定の観念と、特定の社会集団あるいは社会状況との連動」 [浜本 2007: 25] という問題について、以下のように述べている。

説明すべきは、それ（ある観念）がいかに受容され、さまざまに変異しつつ転送され続けているかの方である。われわれは分析の焦点を、観念の誕生＝製作者にではなく、その語り継ぎ・転送のプロセスに向けるべきなのである。…（中略）…結果的に人々によって複製・変奏され、転送され、そして言説空間を流通し続けることに見事に成

功したもののだけが、その集団に固有の観念として人類学者のもとまで届けられるのである [浜本 2007: 27-28、括弧内は引用者による]。

このように浜本は、ある観念が「真」として流通してゆく状況を捉える上で、観念の製作者ではなく、観念が人々による語り継ぎによって転送されてゆく過程へのまなざしが必要であるとする。予言・予言者とそれをめぐる諸事象に関しても、浜本の主張と同様のことが指摘できる。彼の言葉を借りれば、予言者は「ある観念の製作者」に過ぎない。このことから、予言や予言者と社会変動との関係においても、その多様な文脈の中で、「予言」や「歴史」、「真実」とされる「固有の観念」が力を持ち続けているプロセスに注目しなければならないということが指摘できる。この点において、予言・予言者について語り継ぐ周囲の人々は、ある社会において予言・予言者が「真」なるものとして流通し続けているという現象を構成している。もちろん、上述した先行研究の中でも「周囲の人々」の記述がまるでないわけではなかった [e.g. Johnson 1994; Hutchinson 1996; Christiane 2008]。問題となるのは、その描き方である。人々はただ盲目的に一つの解釈に従うのではない。様々な語りは交渉を繰り返し、語り継がれてゆく中で「真」であり続ける。さらに、ただ語りが繰り返されるのではなく、実際に何らかの偶然的で予測不可能な出来事が生ずる度にその語りの真実性が増したり揺らいだりするということが注目に値する。したがって、これまで予言・予言者研究で提示されてきたような人々の固定的な語りや解釈のあり方だけでなく、それらがいかにして人々の間で影響力を維持し続けてきたのかということに注目しなければならない。

そこで本論では人々の「予言の成就」に関する語りと突如として現れる出来事とで織り成される多元的な歴史観の様相に注目することで、人々の間で予言や予言者がいかにして説得力を持ち続けているのかを明らかにする。そのために、「予言の成就」に関する語りを詳しく分析し、ある予言や予言者が世代を超えて人々の間で「真」たるものとして語り継がれ、出来事との関係で刷新されてゆく過程を追ってゆく。

上記の目的を達成するために、まず次章で、「ヌエルの予言者」とされる人物がスーダンの歴史的変遷の中でいかにヌエル社会の中で影響力を持ち続けてきたのかについて概説する。さらに第三章では、具体的な予言についての語りを事例に、それらが世代を超え、スーダンの歴史的出来事のみならず、現在進行形の様々な出来事と絡み合いながら再編されてゆく過程を検討する。

II スーダン国家と「ヌエルの予言者」

1 植民地行政と予言者

本節では、まず北部スーダンで生じたマフディー反乱によってヌエルの予言者が誕生し、

植民地行政のあり方に伴って台頭してゆく過程を追う。そしてその後の第一次・第二次スーダン内戦と平和構築期、そして現代に至るまで、いかにしてヌエルの予言者が人々の間で説得力を持ち続けてきたのかについて概説する。

「ヌエルの予言者」の誕生には、19世紀に北部スーダンで生じたイスラームのメシアニズム運動であるマフディー反乱が大きく関係している [Evans=Pritchard 1940 (邦訳 1978) : 291]。1881年、ムハンマド・アフマドという人物が自らは「マフディー (*mahdī*)」⁵であると宣言し、真のイスラーム共同体を築こうと北部スーダンの大勢のムスリムを導き、反乱を起こした。1885年、マフディー軍はイギリス軍を破って首都ハルツームを陥落させ、マフディー国家を建設することに成功した。マフディー反乱はイギリスによる植民地統治の歴史に大きな痛手を残し、その後の植民地統治のあり方にも大きな影響を与えた。マフディー国家は、イギリス・エジプト軍によって1898年には壊滅させられることとなる。この北部スーダンにおける経験から、植民地政府は北部のマフディーや他のムスリムの指導者を「迷信的で無知な人々であり、それはスーダンの災いの元で、反乱の原因となりうる」と認識し、南部の統治に取りかかる [Johnson 1994 : 25]。その結果、南部に存在していた「シャーマン・呪医」的宗教職能者なども「伝統的指導者」と見なされ、北部スーダンで現れたマフディーと同じような「権力を強奪し、現地の植民地政府任命首長の力を破壊する者」としてみなされた [Johnson 1994 : 25] ⁶。イスラームの「救世主」に脅威を見せつけられた植民地政府や行政官らにとって、南部の「伝統的指導者」はまるでマフディーの亡霊であるかのように見えたのである。そして南部の「伝統的指導者」らは、スーダン・アラビア語で魔術師・ペテン師というようなニュアンスを持つ「クジュール (*kujur*)」という語で呼ばれることになる⁷。多くのクジュールたちは、共同体を統治する首長や政府に対する反逆のリーダーだと認識され、その多くは逮捕または追放された [Johnson 1994: 23-25]。

このようにクジュール討伐の傍ら南部スーダンの支配に取り掛かろうとした植民地政府だが、その統治はどうも思うように上手く進まない。統治の担い手として期待されていた首長らは住民に対して大きな影響力を持っておらず、実際には討伐の対象としたクジュールたちの方がコミュニティ内で力を持っていたのである。植民地政府や行政官らの当初の

⁵ イスラームにおける「救世主」、あるいは隠れメシアを指す。語義は「神によって正しく導かれた者」。

⁶ エヴァンズ＝プリチャード自身も、北部のマフディー運動がヌエルの予言者の出現に関係していると言及している [エヴァンズ＝プリチャード 1940: 291]。

⁷ はじめ、植民地政府はこういった南部の在来のリーダーと目される人物を、イスラームにおける指導者あるいは教育者のような存在を示す「マフディス (*mahdis*)」や「ファキース (*fakis*)」、「ハリーファス (*khalifas*)」という名称で呼んでいた [Johnson 1994: 24]。

期待は大きく裏切られた⁸。そこで行政官らは、影響力を持たない首長に代わって、クジュールたちを上手く統治に利用できないだろうかと考え方を変えていった。その後、力を与えられたクジュールの一部は、「予言者」として社会の中で台頭してゆくこととなる [Johnson 1994: 26]。

最終的に行政官らは、首長よりもクジュールたちを利用するという統治政策の方向転換を図ることで、なんとか統治を進めてゆくことができた。その統治は、当時西洋社会で描かれてきたアフリカの「宗教的人物」や、マフディー反乱によって印象付けられた「指導的人物」のイメージとクジュールたちの実際の影響力との違いに左右されていた。

以上のことから、ヌエルの「予言者」ははじめから社会の中に存在していたというよりは、植民地統治の中で行政官らに「発見」され、植民地政策の中で再構築されてきたということが指摘できる⁹。次で述べるように、1950年代のスーダン独立、そして内戦以降に予言者たちは新たな形で影響力を増してゆくこととなる。

2 内戦から「平和」構築の時代へ

第一次スーダン内戦（1955-1972）は、北部スーダンの政治集団による支配に対し、南部の人々の不満がエクアトリア地方での南部の軍事部隊の反乱となって現れたことがきっかけで始まった。この反乱は1972年のアジス・アベバ合意への署名によって、南部スーダンに大幅な自治権を与えるかたちで終結した。その後、1983年に当時のヌメイリ政権が南部の自治権を弱体化させるような新たな行政区分を導入し、また南部にもイスラーム法であるシャリーア（*shari'a*）を適用しようとしたため、それに対し南部の人々が反発を示し、第二次スーダン内戦（1983-2005）が勃発した。その中心的な反政府組織スーダン人民解放軍（SPLA）であるが、その後内部分裂が生じ、争いは泥沼化していった。SPLAを組織したディンカ出身のジョン・ガラン（John Garang）¹⁰率いる主流の「トリット派（SPLA-Torit）」と、分裂した「ナシル派（SPLA-Nasir）」で、前者は南北スーダン全土の民主化を目的としていたが、ヌエル出身のリヤク・マチャール（Riek Machar、現南部スーダン副大統領）が率いる後者は南部独立を求めて分裂していった。しかし、このSPLA

⁸ 例えばファーガソン大佐は当初「首長」による統治を目論んでいたが、「クジュール」の影響力の大きさに肩を落とし、以下のような弱気な報告をしている。「残念なことに、首長の地位はクジュールによって奪われており、こんな時に人々が満足のいくような解決策を提示するクジュールの働きを止めることはできない」 [Johnson 1994: 259]。そして以降、ファーガソン大佐は他の予言者にも接触を図るようになる。そしてその地域の「クジュールの男」と思しき者を見つけては「首長」になってほしいと要求した。その結果、各地の予言者と政府は共に共同体の秩序を維持しようとするようになったという。

⁹ ただしこのヌエルの予言者の誕生に関しては様々な説がある [e.g. Evans=Pritchard 1940; Johnson 1994; 栗田 2001]。この点についてはまた別稿で検討したい。

¹⁰ 2005年1月の包括的平和調停の調印後、7月にスーダンの第一副大統領に就任したが、同年末、不可解な形で事故死を遂げた。

の分裂と対立は、徐々にヌエル対ディンカという「民族紛争」の形をとるようになったとされる。銃火器の利用もあいまって、ヌエルとディンカはこれまでにない激しい戦いをを行うことになる¹¹。

こうした内戦のなか、ヌエルの予言者たちは精力的に活動を続けていた。例えば第二次内戦時には、新しい予言者とされる人々は SPLA の内部抗争と予言とを関係付けて人々に説明していたという [Johnson 1994: 346]。その結果、SPLA の分裂と度重なる攻撃の中でも、多くのヌエル人は最後には平和がやってくるに違いないと思っていたという [Johnson 1994:346]。その中でも、当時ナシル派のリーダーであったリヤク・マチャールによって「平和」がもたらされるであろうということが積極的に信じられていた。彼はかつての予言者と同じ左利きであるために、人々はマチャールが予言的な力を持っているのではと思うようになった。マチャールの支持者は、マチャールの背後には予言的な権威があると他の人々にも信じさせようと「布教活動」も行っていたという [Johnson 1994: 346]。現在のスーダンの民主化とマチャール、そして予言との関係については次節にて事例とともに検討する。

内戦以後の平和構築期においても、この時期に築かれる「平和」はかつて予言者によって言われていたこととして解釈され、それゆえ過去の内戦は必然的なものであったとされた。予言者らはかつてのようなやり方ではなく、キリスト教や開発援助などのあり方などにも言及し、ときに NGO 主催の平和構築会議にも出席するなどして「近代的」かつ「合理的」に内戦や平和のあり方について説明していった¹²。内戦から平和構築期にかけて、ヌエルの予言者たちは当時の政治状況や生活環境の変化に対し説得力を持つような予言の解釈を巧妙に取り入れながら、人々の間で平和構築者としての力を増していったのだった。

このように予言者が影響力を持ち続けるためには、彼らの噂を聞き、信じ、伝える人々の視点や評価が必要となってくる。人々はどうのように出来事と予言とを結んでゆくことで、「予言の成就」をより「真実」に近いものとして解釈しうるのだろうか。次では、人々によるより具体的な「予言の成就」の語りを分析してゆく。

¹¹ 「内戦」が「民族紛争」の形をとるようになったプロセスについては縄田 [縄田 2007] の議論を参照。戦争における銃火器の利用や殺人の正当化と土着の信仰との結びつきについては、ハッチンソン [Hutchinson 1996] が詳しく検討している。

¹² 例えば、ラク地方に存在していたウット・ニャン (Wut Nyang) はヌエルの諸精霊には言及せず、その背後にあるクウォス、すなわち「神」・「霊」といった「キリスト教的」なニュアンスを持つものだけを言及することにしてきた。また国連などによる援助についても否定的で、経済的自立や政治的独立を強調していた。人々は彼の演説を聞いて感動し、国際機関による援助に頼るのではなく、自給自足の生活を送るために土地を耕すようになったという [Hutchinson 1996: 343]。

Ⅲ 「予言の成就」と新たなリアリティ

このようなスーダンの歴史的変遷の中で、人々は具体的に「予言の成就」という言説を通してどのように出来事について語っているのだろうか。事例を挙げる前に、ヌエルの予言者の中で最も有名なングンデンという人物について簡単に紹介しておきたい。

1 ヌエルの予言者ングンデン

ングンデン・ボン¹³は 1800 年代に生まれ、1906 年にその生涯を閉じた。彼ははじめ、人糞や灰を食べるといった「奇妙」な言動から、人々に「狂人 (*yong*)」と呼ばれるようになった。ところが、彼の数々の発言が的中してゆくようになり、それだけでなく不妊の女性を治すなどという、幾つもの「奇跡」が起こるようになる。そこから人々はングンデンの不可解な言動は、彼が狂人だからではなく「神」と訳される「クウォス (*kuoth*)」¹⁴に憑依されたためではないかと口々に噂するようになった。彼は存命中に予言者として評価を得ることは十分に出来なかったが、むしろ、彼の死後にその評判は一気に高まることとなる。というのも彼の奇怪な言動は、実は次々と起こる出来事を予言していたのではないと言われるようになったからである。彼の予言の多くは「ングンデンの歌 (*diit Ngundeng*)」という形で知られている。彼は多くの歌を残し、歌詞の中にあるとされる「予言の成就」が様々な出来事との関係で読み取られ、広く語られるようになった。現在では、ングンデンを祀った「ングンデン教会 (*dwil kuoth Ngundeng*)」と呼ばれるものもいくつか存在し、少なくとも一部のヌエルの間では「カリスマ」的な存在としての地位を得ている。彼の死から 100 年余りが経過しているが、彼はスーダン内戦や 2005 年の包括平和合意、そして今回の住民投票など多くの出来事を予言したとされる。しかし、一つの予言が一つの出来事と対応しているとは限らず、一つの予言が複数の出来事を指していると言われる場合もあれば、ある出来事が複数の予言の歌に歌いこまれているなどと言われる場合もある。さらに、人々は彼ら自身による出来事の解釈を含む新しい予言の歌を作詞作曲している。

では、彼の評判はどのようにして人々の間で維持され、「真」であり続けているのだろうか。以下では、ヌエル社会で語り継がれている彼の奇跡譚のうちの一つを挙げる。そしてこの語りがどのように新しい出来事や未来に対する希望とかかわり、人々にとってリアリティを持ったものとして立ち現れてゆくのかを追ってゆく。

¹³ ングンデンとはヌエル語で「神の贈り物」の意。

¹⁴ 「クウォス (*kuoth*)」は「神」や「霊」、「精霊」などと訳される。エヴァンズ=プリチャードによれば、クウォスは「空や月や雨は神ではないが、それらを通して顕現」したり、普遍的な「神」として世界全体との関わりで捉えられたり、政治的な動き、あるいは個人との関係で捉えられたりする [Evans=Pritchard 1956 (邦訳 1978) : 3, 184]。

2-1 パディンの戦い

1878年に生じたとされるパディン (Pading) の戦いは、ングンデンの平和調停者としての業績にとって重要な役割を果たした出来事である。この出来事は、ヌエルがディンカの襲撃に成功した例として語られている [Johnson 1994: 84]。読み進めてゆくとわかるように、その語りにはさまざまなヴァージョンがあり、それぞれ予言や神話のようなものが入り混じり、一読しただけでは何の「一貫性」も「整合性」もないように思われる。さらにその後、1902年、1929年の植民地政府による予言者の討伐という出来事にも「パディンの戦い」は顔を出し、それぞれを同じ「予言の成就」という枠組みに取り込んでしまう。また、後述するようにスーダンの民主化という極めて「現代的」な出来事にも、新たな形で登場することになる。パディンの戦いは、次々に起こる出来事と絡み合いながら重層性を帯びてゆく。

以下に取りあげる語りはほとんどが歴史学者のダグラス・ジョンソンの論考 [Johnson 1995] に依ったものである。彼はこの語りの多様性をナイロートに存在する共通のシンボリックなイメージを介した歴史の再構成として解釈している。ここでは彼の報告する語りをまとめながら、彼とはまた視点の違う分析を行う。ジョンソンはパディンの戦いについて、ングンデンと何らかの関係を持つ人々に聞き取り調査を行った。本論の付録にある表は、筆者がジョンソンの記録をもとに、パディンの戦いに関する語りの内容を世代別に並べて作成したものである。本論ではそのごく一部の語りと、それを構成する語りの要素をもとに分析を進める。

まず、パディンの戦いの通説とされているものから紹介しよう¹⁵。

1878年の終わり、ロウ地方のヌエル (Lou Nuer) がディンカとガーワル地方のヌエル (Gaawar Nuer) に襲撃された。ディンカは地方の権威を確立しよう目論んでいた。一方、ロウ地方の予言者ングンデンは数年前に精霊に憑依されたばかりで、はじめはこの戦いを避けようとしたが、結局パディンの周辺のキャトル・キャンプでディンカの襲撃を待ち伏せすることにした。そしてディンカたちがやってきたが、ディンカは攻撃されて川に落ちた。これは平和構築者のングンデンが、自己防衛のために一度だけ戦ったものであるとされている。

では、この出来事についての語りはどのように多様性と複雑性を帯びていくことになるのだろうか。まず、様々な世代、立場のヌエルの人々が語るパディンの戦いに注目してみたい¹⁶。次に取り上げるパディンの戦いは、1930年代、ヌエルの兵士が人類学者エヴァンズ＝プリチャードに語ったものである (付録の表の事例2)。

¹⁵ ただ、その報告が誰にとっての通説として語られているのかはジョンソンの資料からでは読み取れない。

¹⁶ 本章で取りあげる語りにおいて、1~3文までの省略は文中「…」で表し、それ以上の省略については、省略した部分の概要を「()」に示している。また、筆者による補足説明も「()」内に記す。また「()」内の記号A~Oは、後の分析に使用するために筆者が記した。

事例2 パディンの戦いに関する語り（ヌエル人の兵士、1930年代）¹⁷

ヨアル（という人物）はングンデンの警告にも関わらず、ディンカの饗宴に参加し、ディンカはヨアルを捕まえて人質にしてしまった（A）。…親族によって身代金が払われると彼は連れて行かれた。ヨアルは殺される前に、彼がディンカ（出身）の者であり、かつロウ地方のヌエル内の最強の大地司祭であるという事実を示す以下の呪いの言葉を吐いた。「殺せ！…私の土地でお前たちの女どもは二度と子が産めないだろう、…雨が再び降り出したら彼らの足跡はお前たちのもの（足跡）と泥の中で交じり合うだろう。」…（ヨアルの死後、ヌエルはディンカの襲撃に困っていたが、あるディンカを捕らえることに成功した）…（D）ングンデンはそのディンカに良質のミルクを与え、彼らの村に帰す際には新しい槍とクラブも与えた（E）。…（ングンデンの予言に従って、人々はパディンに到着した）（B）…（ディンカが攻撃を仕掛けてきたとき、ングンデンは鱧柄のウシを用意し、供儀した…）（F）それと同時にディンカの予言者であるデンは、そのウシが倒れる前にそのウシを突いてやろうと走ったが、（その場にいた）ヌエルの者たちに邪魔をされ、殺されたために、彼は供儀されたウシとともに倒れた（G）。…（以前クウォスはディンカの祈りを拒んだ）（H）…2つの軍は沼地で衝突し、ディンカは沼地に足を取られ、さらに彼らはングンデンの呪いによって足を重たくされていた。ディンカがヌエルの矢に倒れている間に、ヌエルにはわずかな犠牲者すら出なかったと言われている（I）。…だからヨアルは「足跡が泥の中で交じり合うだろう」と言ったのだ [Evans=Pritchard 1935: 57-60]。

本論末尾の付録にある表の事例1とこの事例2は、ングンデンの存命中、植民地政府の役人に対して語られたものである。この2つの語りに特徴的なのは、ヨアルと呼ばれる人物が人質にされ殺されてしまうこと(A)、ングンデンによるパディンという場所の提示(B)、ディンカのスパイの来訪(D)、ディンカのスパイへのミルクの贈呈(E)と鱧柄のウシの供儀(F)、供儀されたウシが倒れる時の描写(G)、「神」であるクウォスによる拒否(H)、ディンカの敗北、あるいはヌエルの勝利(I)である。これらはングンデンから数えて2～3世代目の人々の語りの中にもたびたび現れる重要な要素である。

事例3から事例7までは、直接パディンの戦いには立ち会っていない人々による語りで

¹⁷ 語りの全体については本論の付録にある表を参照。以下事例1～事例7に関しても同様。付録の表における各語りのプロットは語られた順序通りに並んでいる。A～Oのそれぞれの番号は同じ内容であると筆者が判断したものには同じ番号が記されている。そのため必ずしも番号順に並んでいるわけではなく、また一つの語りの中に同じ番号が複数記されているものもある。番号がないものは、その事例にしか見られなかった語りの要素である。また語られた状況や、語り手の属性などに関する情報は付録の表の備考欄に記した。

ある。まず事例3と事例4のングンデンの息子たちのうち、事例4のマシャルの語りを取り上げよう。彼はパディンの戦いの目撃者に話を聞いているという。以下では、語りそのものではなく、その概要と語りの要素だけを取り上げてゆく。

事例4 パディンの戦いに関する語りの概要（ングンデンの息子マシャル）

あるディンカが神を疑い、ングンデンが聖なるウシに従ってパディンへ向かった（J、B）。そしてあるときヌエルの村にディンカのスパイが現れて捕らえられたが、彼はヌエルが病気であることを確認し、ングンデンによって許され釈放された（M、D、C）。その後ングンデンは鱧柄のウシを用意し、ディンカと戦う準備をした（F）。そして神によって与えられた武器（のちにダンと呼ばれる棒）を掘り起こし、パディンの戦いでその武器によって雷を起こし、ディンカを倒した（N、O、I）。最後に彼は倒したディンカのウシを取ってはいけないとヌエルの人々を諭す（L）。

マシャルの語りでは、パディンの戦いが神からの啓示であることが強調され、ングンデンがディンカを攻撃する際に用いたというダン（*Dang*）と言う棒が登場する（N）。また、戦いが終わった後にングンデンはディンカとの関係の築き方について言及したとされているが、今後の語りではこのようなングンデンの「平和」構築に関する教えがより一層強調されて語られるようになる（L）。

次の事例5と事例6の語りは、ングンデンの親族によるものではないが、事例3、4と同じ世代に属する人々である。その語りでは、細部の描写が切り捨てられ、より簡略化されていることがわかる。ここでは事例6を取り上げよう。

事例6 パディンの戦いに関する語りの概要（シュオル）

ヌエルがディンカのスパイを捕まえてミルクを与え、ングンデンが彼を許し釈放した（D、E）。そしてヌエルの病気を確認したスパイはディンカの軍を率いてパディンに現れ（C、M）、パディンの川辺でングンデンはダンを用いて雷を落としてディンカを倒し、その後人々にディンカの矢を持って帰らないように諭した（N、O、I、L）。

そして事例7の語りはングンデンの孫息子による語りであるが、彼の語りでは、これまでの語りで見られた要素のうち大部分（B、C、D、E、F、G、K、L、N、O）が含まれている。

事例7 パディンの戦いに関する語りの概要（ディーヤー）

ングンデンはウシの啓示に従ってパディンに赴き、ングンデンを信じず戦おうと

したヌエルの男を神に言及しながら論じた (B、K)。ディンカのスパイが現れて捕らえられたが、ングンデンは彼にミルクを与え、釈放した (D、E)。しかしディンカは戦いを仕掛けてきたので、ングンデンは鱧柄のウシを用意した (C、F)。そしてダンが取り出され、供儀されたウシはヌエルとディンカの間で倒れた (N、G)。そしてディンカはダンによって落とされた雷に倒れた (O)。ングンデンは最後に、ディンカの武器を持っていくことは許されない、とヌエルの人々に言った (L)。

以上が 3～4 世代にわたるヌエルの人々によるパディンの戦いに関する語りである。次の表は、これらの要素の内容と、それを事例別にまとめたものである。

表 1：パディンの戦いに関する語りの要素の内容

語りの要素の番号	内容
A	ヨアルを人質に取るが、ディンカは約束を裏切る
B	パディンの戦いの啓示・指示
C	捕えたディンカに和解のチャンスを与える
D	ディンカの男 (スパイ) が訪ねてきて、その者を捕える
E	ディンカのスパイへミルクを差し出す
F	鱧柄の模様のウシの登場・供儀
G	ウシの倒れ方と人々の対応
H	神の存在
I	ディンカの敗北/ヌエルの勝利
J	ディンカは神を疑う・破壊しようとする
K	ングンデンによる戦いの指示
L	ングンデンの和平のあり方に関する教え
M	ヌエルの病の疑惑
N	武器・ダンの登場
O	落雷

表 2：パディンの戦いに関する語りに含まれる要素 (事例別) ¹⁸

事例番号	語りの要素の有無	A-O以外の語りの要素数
事例1	A B C	4
事例2	A B D E F G H I	3
事例3	F G I J K L	5
事例4	B C D F G I J L M N O	6
事例5	B C D E F G L M O	5
事例6	C E H I L M N O	3
事例7	B C D E F G K L N O	3

[Johnson 1995] より筆者作成

付録にある表と合わせてみるとわかるように、植民地時代に語られた事例 1 とングンデ

¹⁸ 付録の表をもとに作成しているため、そちらも参照されたい。

ンから数えて3世代目の事例7はまったく別の語りのようなものである。しかし、その語り継ぎの経過を見てゆくと、世代が下がっていくにつれ、それぞれの語りの細部は切り捨てられ、パディンの戦いはある物語として整合性を帯びてくるのがわかるであろう。つまり、これらの語りの要素とその接合、つまり出来事の展開は、世代が下がるにつれ単純化され、固定化してくるのである。クウォス（「神」）によってなされたパディンという場所の啓示（B）や、ングンデンがディンカのスパイに対してミルクを与える行為（E）、鱧柄のウシの屠殺（F）とダンの使用（N）、そして川でのディンカの敗北あるいは死（I）、ングンデンによる「平和」のあり方についての言及（L）などの要素を介して、多様に思われる語りはある種の「一貫性」を帯びる。A～O以外の語りの要素は、その語りにものみ登場してくるものであり、各々の語りに多様性を与えている。また、事例1、2では「神による啓示」や「ングンデンが起こした奇跡」、すなわちダンによって雷を起こしディンカを倒すことに関する言及があまりみられないのに対し、2世代目、3世代目の人々によってなされた語りではこうした場面が強調されて語られるようになる¹⁹。さらに、ングンデンが発言したとされるディンカとの「平和」構築の教えも、後半の世代になるほど語りの締めくくりとして一種の説話のようなニュアンスをもって語られる。したがって、パディンの戦いから時が経過するにつれ、語られる出来事は一種の神話や伝説のようなものとなってゆくということが指摘できるだろう。次では、こうした要素が新たな歴史的出来事にあわせてどのように解釈され、語られるのかをみてゆく。

2-2 予言者討伐のゆくえ

これまで述べてきたパディンの戦いは、1878年に「一度だけ」起こった出来事ではなかった。ングンデンのパディンの戦いにおける言動は、また新たな形で別の出来事において繰り返されることとなる。それは以下に示す1902年、1929年の政府軍によるヌエルの予言者討伐に関する人々の語りにもみてとることができる。本論の第二章で述べたように、イギリス植民地政府は南部スーダン統治にあたって、「クジュール」と呼ばれた予言者たちを弾圧していた。

1902年、植民地政府はングンデンへの攻撃隊を派遣した。一方ングンデン率いるヌエル側には、組織だった抵抗というのはみられなかった。軍隊はングンデンの住まう村に入り、ングンデンの墓とされるピラミッド²⁰にある象牙を盗み、村を焼き、クウォスに捧げられたウシを盗んだ。その結果、ングンデンは政府に対して敵対心をあまり持っていないことが報告された。あとにも先にもングンデンが弾圧の対象になったのはこのときだけであっ

¹⁹ もちろん、事例1、2がいずれも植民地時代にイギリス人に語られたものであるという状況は考慮されるべき事項である。

²⁰ ングンデンが建設したもので、デンに捧げられたものである。灰や土、粘土などで作られ、その高さは十数メートルにも達する。1927年、植民地政府は爆撃機によってピラミッドを爆撃した。

たという [Johnson 1994: 117]。

ングンデンの息子であるグエク・ングンデンは、政府軍の討伐によって 1929 年に殺害された。1927 年から、植民地政府は「反抗的な態度をとっているクジュール」と目されていたグエクを攻撃の対象としており、激しい爆撃をロウ地方のヌエルに対して行っていた。政府の説明によれば、グエクは射殺される前に、鉄の漁槍を持って現れ、白い雄牛を連れてきたが、ピラミッドの上で射殺された。この襲撃によって、政府軍は「クジュールの失脚」と「魔術的なシンボルである要塞の破壊」に成功したとされる [Johnson 1994: 194-195, 198-200]。では、この 2 つの出来事についての語りを見てゆこう。次の表は両予言者の討伐に関する語りである (表 3)。語りの右に記されている番号はパディンの戦いに関する語りの要素と対応している。

表 3：予言者討伐に関する語り

事例番号	語り手	語りの内容	番号
8 植民地政府による ングンデン討伐について	ガラン・ングンデン	軍隊がングンデンの前にやってきた時、彼は突然「止まれ！」と叫んだ。すると軍隊は止まった。	
		ングンデンはダンに空に向かって三回持ち上げた。	N
		彼は「クウォスは不在、進軍は中止である」と言った。	H'
		軍隊の長はこれに反対したが、ングンデンが何を言っても聞かなかったため、軍隊は解散することとなった。そしてロウのヌエルは村を捨て、ブッシュの深いところに行くことにした。	K'
		「クウォスは戦いを避けながら、我々と共に歩んでいる」と言いながら。	H'
		ングンデンはピラミッドから漁槍と特別なウシを持ってきた。彼が憑依されたとき、人々はみなブッシュにおり、彼が漁槍を大地に突き刺し、喉が渴いた人々を雨で潤した。そして多くの白や黒のウシを屠殺し食料として与えた。	F
		軍隊が村を破壊した後、ングンデンは、自分は戦うために戻ってくるだろうと言ったが、彼は軍隊を決して捕らえようとしなかった。	I
9 植民地政府による グエク・ングンデン討伐について	デン・ホル・ングンデン	グエクはトルック (Turuk、白人、あるいは外国人の意) と戦うつもりはなかった。戦いを仕掛けて来たのはトルックの方だ。彼らはグエクにその場所をあけわたすように言ったが、彼は拒んだ。	
		すると翌日、(もともとグエクに憑いていた) グエクのクウォスは彼から去っていった。トルックが来ると、グエクはウシを連れて彼らの方に向かって行く。トルックはグエクは交渉しようとしているんじゃないかと言ったが、兵士達はそれは違うと指摘したんだ。	H'
		グエクはウシを屠殺しようとしたが、ウシはぐるりと回って行ってしまい、それを何度も繰り返していた。	F'
		そうしてグエクが嘆いているうちにトルックは銃弾を放ち、グエクはウシと共に倒れてしまった。グエクが殺されて、私達は逃げた。	K
		そうしてトルックは30人ものングンデンの家族を殺し、すべてのウシを奪っていった。	I'
		(補足：結果としてダンは植民地政府に奪われた)	N'

[Johnson 1994, 1995] より筆者作成

ングンデン討伐当時 15 歳前後であったングンデンの息子のガランによれば、ングンデンはクウォスによる啓示がなかったために戦うことをやめ、その結果ヌエルの一行は弾圧を免れたことができたという (H' → K' → I)。

一方でグエク・ングンデン討伐に関するデンの語りにおいて、グエクが戦いへ踏み切ったためにクウォスは彼を見放した、という展開になっている (K → H')。したがって屠殺は失敗し (F')、グエクは死に至り (I')、ダンは奪われることとなった (N')。ここではングンデンの討伐とはまた異なる過程で「予言の成就」に結び付けられていることがわかる。

このグエクの敗北の原因について、ロウ地方のヌエルの人々は後世になって様々な議論を重ねているという。その意見には以下のようなものがある [Johnson 1995: 199]。

- ・グエクはデンの言葉より自分の年齢組の言うことを聞くからだ。
- ・不妊を克服した女性とセックスしたからデンに見捨てられた。
- ・(他の予言者によって) ングンデンのピラミッドの東から攻撃を迎えろと言われたのに西から行ったからだ。

ここではなぜグエクが死に至るはめになったのかという説明が、先の2つの出来事において「ングンデンが勝利したときに現れたクウォス(神)」との対比でなされていることがわかる。このグエクの敗北についても、人々の語りの中にパディンの戦いと、1902年のングンデン討伐の断片を見て取れるだろう。屠殺の失敗(F’)、クウォスの不在(H’)というパディンの戦いでは起こらなかった事象が、すべてグエクの死、すなわちヌエル側の敗北(I’)という結末に至る過程の中に含まれている。そしてその後にグエクの死を招いた原因は、精霊デンがグエクの戦いを認めなかったからではないか、ということに集中している。つまり、「クウォスの啓示がない(H’)」ということは、「勝利がもたらされない(I’)」であろうという一種の予言であり、実際にグエクは啓示が無いにも関わらず戦ったため(K)、植民地政府によって殺害されることとなった。パディンの戦いと対照的な展開であったことが出来事の進行の中に見出され、そのグエクの死は「予言の成就」となった。パディンの戦いのように勝利するという結末自体が「予言の成就」のではなく、結末に至るまでの過程の中に「予言の成就」は読み込まれているのである。この予言者の討伐に関して、それぞれの語り手は出来事の「結果」と「原因」とを相互に参照しながら「予言の成就」に結び付けている。この語り手の解釈のあり方によって、「予言の成就」である出来事の実在性は揺らぐことなく、むしろ強化されることとなる。

グエク・ングンデン討伐の結果、植民地政府に奪われたングンデンの聖なる棒であるダンは、パディンの戦いから人々の語りの要素として、特にヌエルや予言者に勝利をもたらす「真実」の要素としてたびたび登場してきた。次に述べるように、民主化が進められるスーダンにおいてこのダンはある特定の人々にとってますます重要な意味を帯びつつある。まず、このダンにまつわるスーダンの「歴史的出来事」について紹介し、これまでの事例を通じた分析と今後の研究の展望を述べ、本論を閉じたい。

2-3 「民主化」へのまなざし

パディンの戦いからおよそ80年後の2009年に、ダンはやがてイギリスからスーダンへ返還されることとなった。グエク・ングンデン討伐の際に奪われてから、突如として姿を現したダン、現在のスーダンにおいていかなる意味を持ちうる、あるいは与えられ

うるのだろうか。次では、このダンが返還された日の様子をふりかえり、その後に噴出した、ングンデンによる「予言の成就」に関する人々の語りを取り上げ、考察へと進みたい。

ダンが返還された当日、南部スーダンの中心都市であるジュバには何千人もの南部スーダン人が集まった。それはヌエル人だけではなく、様々な民族集団からも多くの人々が空港で行われた歓迎セレモニーに参加した。現在の南部スーダンの副大統領リヤク・マチャールは何千人もの群衆の前で「ングンデンは南部スーダンの独立、2011年の住民投票を予言していたのだ！」という旨のスピーチを



写真1：ダンを掲げるリヤク・マチャール²¹

行った。このニュースはインターネットなどの報道を通じて配信され、スーダン

国内で当時大きな関心の的となった。例えばインターネットのニュースサイトはこの日の出来事について以下のように報告している²²。

マチャールは、「ヌエルは80年もの間誰もダンを見たことがなかった」と言い、ダンを取り出して、その場にいた全ての人が見えるように掲げた（写真1）。すると誰もがデジタルカメラや携帯電話でダンを撮影し、「あれに触れたら、幸運がもたらされるぞ！」と叫び、一瞬でもダンに触れようと身を乗り出していた。群集は、南部スーダンの統合を指すかのように「一つになろう！一つになろう！」と叫び、沸き上がったという。その後も各地でダンの返還を祝うセレモニーが開かれ、その都度人々はウシを供儀し、ングンデンの歌を歌い、ダンスを踊り、ダンを目でも見ようと多くの人々が集まった。そしてその集会では必ずと言っていいほど住民投票の結果——南部スーダンの独立——とングンデンによってなされた「予言の成就」との関係が合わせて語られていた²³。このダンの返還について、以下のようにさまざまな立場の人々から意見が噴出した。その語りの中には、これまで取り上げてきた事例のごく断片が含まれているに過ぎないが、その断片が彼らのリアリティをいかに彩っているかが下線部に見てとれるだろう。

・ングンデンが活着している時、彼はうそつきだと思われていた。我々は彼の世代の人と違つて彼を信じる。今の世代になつてやつと彼の予言は成就したんだ。彼の言つ

²¹ Sudan Tribune 2009年5月18日の記事。2010年11月25日閲覧。

²² Sudan Tribune 2009年5月17日、5月21日の記事。2010年11月25日閲覧。

²³ ングンデンはかつて「2つの旗が交わることはない」という予言をしたとされ、それは現在のスーダンには北部スーダン、南部スーダンの2種類の「国旗」があるため、ングンデンの予言はそのことを指しており、つまりは「南部スーダンの独立」を意味するものである、とされている。

ていたことと、今スーダンで起こっていることを比べれば、彼がいかに正確なことを言っていたかわかるだろう（ヌエルの年配者、2009年5月）。

- ・サルバキール²⁴がダンに触れると死んでしまうため、リヤク・マチャールはダンを利用して南部スーダン政府の大統領になろうとしている [Johnson 2009: 7]。
- ・マチャールはダンを政治化している²⁵（ングンデンの遺族、2009年5月）。
- ・昔ングンデンはあれを銃のように使ってディンカを殺した。だからマチャールはあやまって（銃の様にはではなく、写真1参照）いつもダンを持ち上げるんだ。ディンカはダンを恐れているからね（30代のヌエル人男性、NGO職員、2011年1月）。

さて、ここで本章を通じて取り上げてきたパディンの戦い、各予言者の討伐、そしてダンの返還という出来事に関する語りの中で、各々の語りに一貫性を持たせる要素であると指摘したクウォスの存在、戦闘の有無、その結果という出来事の展開に注目してみよう。各人の語りから導かれるパディンの戦い、2人の予言者討伐、そしてダンの返還という出来事の展開は、以下の表のようにまとめられる。

表4：語りから見る4つの出来事の展開

		クウォスによる啓示	対応	勝敗	ダンの使用	「平和」構築
1	パディンの戦い (1878年)	有 (H)	戦闘 (K)	勝利 (I)	ディンカを倒すために使用される。	成功
2	ングンデン討伐 (1902年)	無 (H')	回避 (K')	回避 (I)	政府との戦いを回避するために使用される。	成功
3	グエク討伐 (1929年)	無 (H')	戦闘 (K)	敗北 (I')	政府にダンは無効になる。	失敗
4	ダンの返還 (2009年)	—	—	—	副大統領リヤク・マチャールの下で保管され、議論を招いている。	「南部スーダン独立」の後に訪れるであろう「平和」との関係で語られる。

[Johnson 1995, 2009] より筆者作成

パディンの戦いについての語りの事例から、「クウォスの啓示」の有無は「戦いの勝利」や『「平和」構築』にとって必要な要素であった。ングンデン討伐の際、「クウォスの啓示」がなかったためにングンデンは戦わず、「勝利」こそしなかったものの、「平和」を維持することが出来た。グエク討伐の際には、「クウォスの不在」にも関わらず戦闘に踏み切った。したがってグエクの「敗北」と「死」という新たな「成就」を導くこととなる。つまり、パディンの戦いやングンデン討伐の時には生じなかった出来事が生じたために、その結末

²⁴ 現在の南部スーダンの大統領でディンカの出身。サルバキールは当日、ダンの返還を祝うセレモニーに「偶然にも」参加することができなかったという。

²⁵ ングンデンの遺族はこのような意見から、ダンの歓迎を祝うセレモニーには参加しなかった。彼らはこのセレモニーに合わせて、ングンデンが「本当に」予言したことなどを記した声明文を主催者に提出している。

も反転し、それゆえこれも「予言の成就」である、という解釈がなされている。2009年の予期せぬダンの返還は、「南部スーダンの独立」や「リヤク・マチャールのリーダーシップ」、あるいは「ヌエル対ディンカ」といった部族主義的な考え方に結び付けられている。各々の「真実」はそれぞれの表情を見せながらも「ダン」や「ングンデン」という要素を介して「予言の成就」として統合されている。

前節と本節で取り上げてきた語りの要素とその接合過程の共有を通じて、「パディンの戦い」という出来事群はある程度の一貫性を保ったまま展開し、さらに別の出来事をも「同じ」出来事の枠組みの中に取り込んでゆくことをみてきた。しかし、ただ出来事の枠組みの内部に諸々の事柄が組み込まれてゆくだけではない。突如として現れた偶然的な出来事によって、「予言の成就」としてあった言説の枠組み自体が溶解し、「整合性」を生み出すべくまた新たな秩序——「真実」のありよう——が見出され、要素はゆるやかに結合し始め、新たな枠組みを形成してゆく。こうしてある出来事を他の出来事との延長線上で考えることが可能となり、一度成立したかに思えた「予言の成就」のあり方は、たびたび装いを変えて繰り返されることとなる。そしてその都度、「予言の成就」という枠組みの中で欠かすことのできない事象であるングンデン、ダン、「平和」などを結節点として「真実」は新たな領域へと移り、時に反転しながらそれでも「同じようなこと」として展開し続けているのである。

IV おわりに：「予言の成就」の枠組み

本論では、「予言の成就」に関する語りの分析を通じて、ある言説と出来事とがどのように関係づけられ、真実性を保ったまま人々の間で語り継がれてゆくのか、いわば「真実の転移」とでも言えるプロセスを検討してきた。

植民地時代に行政官らに見出され、独立から内戦、平和構築期にかけて台頭してきた「ヌエルの予言者」にとって、彼らの予言を信じ、伝える人々の視点は欠かせないものであった。人々の多声的な語りから導かれる各々の出来事群は、ある特定の要素を結節点とし、語り継がれる中でその都度拡大し、重複し、分散し、複数の人々にとって「理解可能」であるものとして流通する。これらの出来事を形成してゆく各要素の結びつきは、維持されたまま「真」なるものとして流通してゆくものもあれば、語られたとたんに「真」ではないものとして瓦解してしまうものもある。しかし、一度ほどけてしまったかに思えた出来事を構成する各要素の結びつきも、また予想外の出来事が現れることによって、人々の間で「真」たりうる枠組みが徐々に形成され、結び直される。この奇妙な出来事の連鎖はどこどころで重複し、その文脈によって様々な意味が生成されながら語り継がれる。出来事の網の目をなす選択された結節点と、そこから切りだされる出来事群、そして外部からの偶然的な出来事は、ゆるやかな「原因」と「結果」の関係で結ばれ、様々な背景を抱え

た「周囲の人々」にとって腑に落ちうるストーリーとして重層性を帯びてゆくのである。

最後に、今後の研究の課題と展望を述べておく。本論ではヌエルという一民族集団内で、いかにしてある言説が「真」であり続けているのかを明らかにした。現在の南部スーダンを取り巻く状況で興味深いのは、ヌエルの予言者は「ヌエル」という一民族集団を超えて語られているということである。さらには、ヌエル社会の内部でも、キリスト教徒や年齢・性別などによって予言の受け止め方は多種多様でありながらも、ある「真実」の姿として流通している。数々の援助団体や政府の組織が南部スーダンの「未来」を形にしてゆこうと開発を進める一方で、この「予言の成就」のありかたもまた、彼らが語る「未来」の姿である。彼らの語りから見えてくる「未来」や「希望」と、そこから導かれる「現在」へのまなざしがいかにして外的な要因と絡まり、内部の社会関係とともに動き、彼らにとっての説得力や正当性の底流をなしているのかを追うことが今後の課題として残るだろう。

付録

表 パディンの戦いに関する語り

事例番号	語り手	世代/ングンデンとのつながり	語りの内容	番号	備考
1	デン・レアカ (精霊ディオとも呼ばれる)	1世代目/ングンデンと同時期に活躍した予言者	18年ほど前、ディンカはルアッチ、ソイ、ニャルウエングなどの土地を所有していて、ヌエルの長であったヨアルに彼らの土地に現れた霊を寝かせるように頼み、彼らの土地へと誘った。	A	ガーワル地方の予言者。1905年にイギリス人行政官に語られた。この語りは行政官が手記に書きとめたものである。この行政官はヌエルとディンカの対立の起源であるものとしてこの語りを報告した。当時ヌエルはディンカををよく襲撃しており、政府のヌエルに対するイメージは良くなかった。そこでこの語り手はヌエルのイメージを払拭するためにこの話をしたとされている [Johnson 1995: 199]。
			そして彼を囚人として閉じ、多大な身代金(ウシで支払われる)を要求し、それは支払われた。ディンカはヨアルを殺してしまい、ソバット(川)の方に逃げようとした。	B	
			しかし、ディオ (語り手、あるいは語り手に憑依した精霊) は彼らをパディンで止めた。		
			さらにディオはすべてのヌエルを集めて、「一つになって行こう」と言い、ディンカを壊滅させようと試みた。		
			ディンカの長ら (sheikhs) を少しの間囚人として捕らえていたが、彼 (ディオ) は彼らに自分たちの土地に帰り、昔の土地を耕し、ディンカの人々とウシを連れて行くように、というチャンスを与え	C	
			しかし、ディンカからはその土地をもう去り、フルース (川) の河口に下り、その場所では暮らしている。		
			ディンカが移り住んだ土地は政府に保護されており、ヌエルに対する襲撃も継続的に行われている。		
2	ヌエルの老兵	1世代目/パディンの戦いのきっかけの一つとなったディンカの男を捕まえたヌエルの兵士	ヨアルはングンデンの警告にも関わらず、ディンカの饗宴に参加した。		1930年代、エヴァンズ=ブリチャードに語られ、記録されたもの。この語りに登場するディンカの予言者であるデンと、ヌエルの「神」・「精霊」であるデンは同一人物ではない。エヴァンズ=ブリチャードによれば、この話はヌエル社会において、ディンカの人々がいかに神をだますか、そしてヌエルのウシを盗むかということを主張する時に語られるという [Evans=Pritchard 1935: 5]。
			ディンカはヨアルを捕まえて人質にした。ディンカの予言者であるデンは、大量のウシを持ってこさせないと殺すと脅した。ヨアルの親族や近隣の者たちはウシの群れを用意して持って行ったが、ディンカの人々は裏切り、ウシとヨアルを連れて行ってしまった。	A	
			ヨアルは殺される前に、彼自身がディンカであり、ロウ地方のヌエルの中での最強の大地司祭 (Kuoor Muon) であることを示す呪いの言葉を吐いた。		
			「私を殺せ、お前たちは私の土地で二度と子供を産めないだろう。雨が再び降り出したら、彼ら (ヌエル) の足跡はお前たちのものと泥の中で交じり合うだろう。」		
			ヨアルの死後、ヌエルはディンカによる襲撃に悩まされていたが、ある日 (語り手であるヌエルの老兵は) ディンカの者を捕らえるのに成功した。ングンデンにディンカの者を傷つけないように言われていたので、捕まえた男をングンデンのところまで連れて行った。そしてその男はヌエルの持っているウシの群れと、彼らの敵、病への対策を偵察することが出来た。	D	
			ングンデンはそのディンカの者を捕す前に、良質のミルクを与え、新しい槍とクラブも与えた。	E	
			語り手はその男が帰る際に、ングンデンが以前見たということーディンカの大軍がパディンで集まり、さらに彼らはガーワル地方のヌエルと組んでいることを告げた。	B	
			ングンデンはディンカの存在には気づかず静かにウシを放牧していた。		
			しかしディンカが攻撃を仕掛けてきたときに、彼は急いで罎柄のウシを用意し、敵が来る前に神であるデンに人々を助けてくれるよう頼むために供儀をした。	F	
			ディンカの予言者デンはングンデンが供儀したウシが倒れる前にそのウシを突いてやろうと走ったが、ヌエルの者に邪魔され、殺されたために、デンは供儀されたウシと共に倒れた。	G	
神であるデンはディンカの祈りを拒んだ。というのも、以前神であるデンがディンカの土地に行った時彼らに拒まれたから。神であるデンは彼を受け入れてくれたヌエルの方の供儀を受け入れた。	H				
			(ヌエルとディンカの) 2つの軍は沼地で衝突し、ディンカは沼地に足を取られ、さらにングンデンの呪いによって足を重たくされていた。ディンカがヌエルの矢に倒れている間に、ヌエルにはほんの少しの犠牲者もでなかった。	I	
			だからヨアルは、「足跡が泥の中で交じり合うだろう」と言ったのだ。		
3	ガラシ・ングンデン	2世代目/ングンデンの息子	神的なもの (Divinity, 以下「神」とする) がやってきたとき、全てのディンカはそれを破壊しようとした。ングンデンはこれに気づき、コアロルの方 (東) に逃げた。	J	1976年に歴史学者ジョンソンに語られたもの。以下の事例3~7まではすべてジョンソンに語られたものである。彼は当時生存していたングンデンの子の中では最年長である。パディンの戦いについては、ングンデン本人や、ングンデンと共に戦いに参加した人々に話を聞いた。
			(ングンデンが振り向くと) コル・ルアッチは「兄弟よ、神は帰ってきた、戦おう。どうして人々をジカニ (地方) に連れて行きたいのか?」と言った。		
			ングンデンはバダイに帰り、コルと話し合い、コルを叩いた。そしてコルもングンデンを叩いた。ングンデンは叫び、周りの人々は飛び上がりそうだった。		
			ングンデンは「だめだ、神を守ってはいけない。それ (コル) は神の子供だ。川へ向かおう、それは川に現れる。」と言った。	K	
			彼は川に行き、「このディンカの土地に村を作ろう」といい、村を作り終え、仕事が終わった後に彼はディンカをそこに招いた。		
			ドールの予言者 (ングンデンの弟子) は、他の予言者と共にいた。戦いが始まったとき、はじめに (ディンカとの) 戦いに対面したのは彼らだった。		
			ングンデンは罎柄のウシをディンカに会わせるために連れ出した。	F	
			するとディンカは「やつらはあれ (ウシ) を無駄にしている」と言った。		
			ングンデンはウシを突き、ウシは倒れ、その角は地面に深く刺さった。	G	
			ングンデンは「残りを殺せ、だがモゴグにいるディンカには一切触れるな。ガーワル (地方のヌエル) がぞいつらをすぐ殺すだろう。お前が終わったら、帰って来い。」	L	
			何人かのディンカは追われて川に入り、漁船で突かれ川の外に追い出された。それは2日間かかり、終わった。	I	

事例番号	語り手	世代/ングンデンとのつながり	語りの内容	番号	備考
4	マシヤル・ングンデン	2世代目/ングンデンの死後に生まれた息子	ヌアール・メルは神を疑い、彼は全ての土地を破壊した。	J	語り手の兄弟であるグエク・ングンデンが植民地政府に殺害された時(1929年)にはまだ成人ではなかった(イニシエーションを受けていなかった)。パディンの戦いについては、その戦いの目撃者たちから情報を得たと言う。
			ディンカは「ロウ(ロウ地方のヌエル)に矢を持っていく、ロウにはたくさんウシがいる。それでそれらをパディンで捕まえる」と言った。		
			ングンデンはパディンから逃げた。…すると白いウシがいた。彼はよく神に捕まえられた白いウシがいたと言っていた。…そのウシは震え、キャンプの真ん中に立った。		
			そしてそのウシは(パディンの方角に)を向いた。人々はングンデンを呼び止めようとしたが、彼は聞かず、パディンの方へ向かった。	B	
			ングンデンはヌエルの人々に、「行ってウシを取ってこよう、われわれはパディンへ戻るのだ」と言った。そしてヌエルは戻り…パディンに寝泊りし始めた。そこには予言者ドールの一行もいた。		
			ディンカのスパイがやってきた。その時ヌエルの人々は飢えていて、とても体が細くなっていた。人々は体を灰で磨き、白くしていた。朝にはウシの糞を燃やした灰で歯を磨いていた。それを見たディンカは、「ロウ地方のヌエルは、何か命を脅かされる病気に罹っている、やつらのウシを集めよう」と言った。	M	
			ングンデンは「ディンカがやってくる」と言い…2人のディンカをヌエルは捕まえた。1人は逃げ	D	
			ングンデンは捕らえた男に「何が欲しいか?」と聞き、彼はングンデンは捕らえられるだろうということ告げた。…そしてディンカを帰したが、その後ディンカはすぐに現れた。	C	
			他の弟子を追い払うのに使っていた鱗柄のウシがいた。	F	
			ングンデンは人々に、「私は何か来る時のために鱗柄のウシを用意しておいた。それはそのウシの角のためだけに敗れるだろう。」自分が予言者であるかのように振舞う人々は、そのウシを槍で突くように言われたが、(そうしようとしても)その槍は曲がるか、跳ね返ってきてしまう。ングンデンがその鱗柄のウシをディンカのところに連れてきた時、彼はディンカを殺す準備を始めた。		
			彼は武器なしで歩いてきた。彼の武器は神によって与えられており、それはある木の下に埋められていた。「揺り起こせ、これはこの世でお前のことを護ってくれるだろう」と神が言った。…それは何色ものメタルの輪で覆われた曲がった弓のようなもの(=ダン)だった。	N	
			ウシが倒れた時、ディンカは完全に散らばった。	G	
			そしてングンデンはそのバトンを持ち上げ、すると雷が落ちた。	O	
			…その雷のせいでディンカは死んだ。彼らはパディンの川で死んだのだった。	I	
ロウ地方のヌエルはその後ディンカのところにウシを取りに行こうとしたが、ングンデンはそれを止ディンカのせいでだめになった。…そのウシは彼らのためのものだ。」	L				
5	ビル・ピート	2世代目/マシヤルと同じ年齢組に属する	ディンカがヌエルを調査したとき、あるディンカはングンデンを殺して彼のウシを奪いたいと思い、彼は仲間を連れてその地に寝泊りした。		父は予言の歌の歌い手であり、彼の兄はングンデンの息子であるグエクとともに植民地政府に殺害されている。パディンの戦いの目撃者に話を聞いたと言う。
			夜までにングンデンは、神に「パディンに行け」と言われていた。…そしてパディンへと向かった。全ての人々が、ドールのキャンプの人々でさえ集まった。	B	
			彼(ングンデン)がパディンに着くと、一人のディンカが訪ねてきた。	D	
			ングンデンはヌエルに「あるディンカが訪ねてくるだろうが、彼を殺すな、ただ連れて来い」と言っ	C	
			ある日ディンカが連れてこられた。…ヌエルの人々は歯を灰で磨いており、指をのどに入れて吐いていた。…そして病気が彼らを死に追いやっているのではとディンカの者は話した。…	M	
			…ングンデンは彼にミルクを与えた。	E	
			ディンカは自分たちはヌエルに戦いを仕掛けてくることを話したが、ングンデンは他のディンカとともに帰ってこないように言った。	C	
			…パディンで戦いが仕掛けられてきたとき、ングンデンは鱗柄のウシを率いて彼らのもとに行っ	F	
			ヌエルとディンカは向かい合って並び、その間にウシはつながれた。ングンデンが槍を刺すと、ウシはディンカの中で倒れた。	G	
			すると雷が落ち、ディンカとヌエルは倒れた。	O	
			ングンデンは彼の羊の皮を取って、一人の人物を殴った。		
			それから彼はディンカを殺した。…	I	
			ヌエルはディンカのウシのところまでたどり着くところだったが、神はそれを拒み、ガーワル地方のヌエルが飢えに苦しんでいることを指摘した。		
			いくらかのヌエルは、強さを手に入れたいと思うあまり神の言うことを聞かなかった。すると彼の足は潰瘍となり、彼が心を入れ替えると、それは治った。		
全てのロウ地方のヌエルの人々がディンカは雷に打たれたと聞き、「それは神になったのだ」と言った。彼(ングンデン)を昔拒んだ者も今は戻ってきて、彼を受け入れている。					
ングンデンは飢餓に苦しんでいるというガーワル地方のヌエルの人々について言及する。ングンデンはさらにディンカの人々と和平のあり方についても言及した。人々がヌエルとディンカの間にあるパディンと呼ばれるキャンプにいた時、ングンデンは「もし狩りに行ってディンカを見つけたら、そいつは殺すな」と言った。	L				
6	シュオル・ブユ	2-3世代目/ングンデンの歌の歌い手	ルアッチ地方のディンカがブッシュに隠れているのが見つかると、人々は殺そうとしたが、ニャイエルの息子(ングンデンのこと。以下ングンデンと記す)が殺すなと言っていったから、そいつを捕まえてキャンプに連れて行った。	D	グエク・ングンデンの死後に生まれ、彼の父はングンデンと付き合っていたらしい。パディンの戦いに関する話は、戦いには直接参加しなかった者、すなわち第三者から話を聞いたと言う。
			ングンデンは人々に誰も彼に触れなかったどうかを尋ね、そのディンカの男にミルクを与えた。	E	
			その男ははじめミルクを飲むことが出来ず、人々はボリッジを作ってやったが、3日後にはミルクを飲むことが出来ていた。5日目には完全に彼の体調は良くなった。10日後、男はングンデンに自分はここを立つことを告げた。		
			男はよくヌエルの人々が朝にウシの糞を燃やした灰で歯を磨きをしていたのを見ていた。その灰は乾季のはじめで土のように赤かった。	M	
			ングンデンはその男を帰してやった。	C	
			男は村に帰ってヌエルの人々のことを話し…ヌエルの人々は血を吐いており死にかけていると伝えた。	M	
			ディンカは夜にやってきて、パディンの周りを囲んだ。全ての人々は眠りこけていたが、ングンデンは自分のパイプを吸って起きていた。…ある女性が起きて、夫を起こして戦争だとなげ、夫はングンデンに知らせたが、ングンデンは「寝てなさい」とだけ言った。		
			夜明けごろ、ングンデンは人々に「怖がるな、逃げずとも良い」と言い…彼のパイプとバトン(=ダン)を用意した。バトンは右手に、パイプは左手に握られた。	N	
			ルアッチは彼に会い、ヌエルに「やめてくれ」と言ったが…そのバトンでディンカを震え上がらせた。そしてバトンに雷が落ち、それは壊れた。	O	
			ある者は土の上で死に、またある者は川で死んだ。…	I	
戦いが終わりキャンプに帰ると、ある生き残った者が「死んだすべてのディンカの矢を集めよう」と言ったが、ングンデンは「集めてもいいが、持っていくな…」	L				
川にはいくらか魚がいたが、戦いのせいでなくなってしまった。川に隠れていた者たちは見つけられ、殺された。中には好みの矢を見つけてそれを取った者もいたが、神(Divinity)は彼らを見ていた。	H				

事例番号	語り手	世代/ングンデンとのつながり	語りの内容	番号	備考
7	ディーヤー	3世代目/ングンデンの孫息子	ヌアール・メルという名のディンカの男がおり…彼も神 (Divinity) を持っていた。…		シュオールと同じ年齢組に属する。多くのングンデンの息子たちの影響を受けており、多くの話を知っている。この話は父方のおじに話を聞いたという。
			ングンデンがバディンに向かっていた際、ディンカは彼に「自分たちは全てのものを奪うことが出来るが、ウシだけ残していかないか」と言い、ディンカの人々は自分たちのリーダーであるヌアールとングンデンはヌエルに「ディンカがおれわれを捕まえようとしている、逃げよう」と言い…ヌエルは逃げた。…	B	
			(彼らは様々な場所を転々とし、ピボール川の方に行こうとしていた)。すると白い雄牛がウシの群れを牽いて戻ろうとした。ングンデンはウシを連れ戻さないようにいい、ウシがそう決めたようにバディンに戻るのが良い、とした。…彼らはウシに縄をくくった。	B	
			人々は「ングンデンは我々を死の場所へと連れて行くこうとしている」と疑った…が、「誰も先に行く人がいないので彼は殺せない」とある者が言った。		
			コルルアッチという男が、「もしお前たちがングンデンを恐れているなら私が行こう」と言い…ングンデンを刺し殺そうとしたが、ングンデンは彼に「私の母方のおじの息子よ、神 (Divinity) を守ろうとするな。この棒は神の手にあるもので、それはお前のものだったか? …戦うのをやめよう」と言った。		
			そして彼らはバディンにたどり着き、キャンプを作った。	B	
			…ングンデンは「明日ディンカが来るだろう」と言った…そして捕まえられるであろう一人のディンカの男をキャンプにつれてくるように言った。ディンカは捕まり、…ングンデンにディンカが攻めてくるであろうことを話した。	D	
			ングンデンはそのディンカの男にミルクを与え、他のディンカと一緒に攻めてこないようにと言い、その男を捕した。	E	
			その男は自分のキャンプへと帰り、ヌエルがいることなどを伝えた。そして戦いには行くが、自分は(隊列の)後ろの方に残ることを告げた。3日後、ディンカはングンデンのキャンプにたどり着こうとしていた。	C	
			ングンデンは、「ディンカは明日来るが、恐れを抱かないように」と言った。人々は「…逃げるべきではないのか? もし多くの人が死んだらどうするんだ」と聞いたが、ングンデンは「心配するな…」と言った。	K	
			ディンカは夜明け頃にやってきて、キャンプにたどり着いた…人々はディンカを恐れた…ングンデンはキャンプに残り、…鱈柄のウシをまた別の予言者に用意させた。	F	
			彼は神に悪かれる前に掘り起こした木の根(=ダン)を持っていて、それは根なのに滑らかで、銅やアルミニウムが回りに巻かれていた。	N	
			鱈柄のウシが持ってこられ、…そのウシはヌエルとディンカの間に入り、…川沿いのディンカのところで倒れた。	G	
			ングンデンはバトンを取り、持ち上げた。	N	
全てのディンカは雷に打たれ倒れた。…彼らはバトンによって生じた雷によって倒れたのだ。	O				
ングンデンはここでは受け入れられていた。…彼はディンカの武器を全て集めるようにいい、誰もそれらを取っていくことは許されないと説いた。	L				

参考文献

Anderson, David and Douglas Johnson. H (eds.)

1995 *Revealing Prophets: Prophecy in Eastern African History*. London: James Currey.

Arens, William

1983 Evans-Pritchard and the Prophets: Comments on an Ethnographic Enigma. *American Anthropologist* 78: 1-16.

Beidelman, T.O.

1971 Nuer Priests and Prophets: Charisma, Authority, and Power among the Nuer. In *The Translation of Culture: Essays to E.E.Evans=Pritchard*. T.O.Beidelman (ed.) , pp. 375-415. London: Tavistock Publications.

バランディエ、ジョルジュ

1983『黒アフリカ社会の研究—植民地主義とメシアニズム』井上兼行訳、紀伊國屋書店。

Christiane Falge

2008 Countering Rupture: Young Nuer in New Religious Movements. *Sociologus* 58(2): 169-195.

Evans=Pritchard, E.E.

1935 The Nuer: Tribe and Clan. *Sudan Notes and Records* 18(1): 37-87.

- 1940 (1978) *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford: Oxford University Press. (『ヌア一族—ナイル系—民族の生業形態と政治制度の調査記録』向井元子訳、岩波書店。)
- 1956 (1982) *Nuer Religion*. Oxford: Oxford University Press. (『ヌア一族の宗教』向井元子訳、岩波書店。)

浜本 満

- 2007 「イデオロギー論についての覚書」『くにたち人類学研究』2: 21-41。

Hutchinson, Sharon. E.

- 1996 *Nuer Dilemmas: Coping with Money, War, and the State*. Berkeley: University of California Press.

Johnson, Douglas. H.

- 1994 *Nuer Prophets: A History of Prophecy from the Upper Nile in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Oxford: Oxford University Press.
- 1995 The Prophet Ngundeng and the Battle of Pading: Prophecy, Symbolism and Historical Evidence. In *Revealing Prophets: Prophecy in Eastern African History*. D. Anderson and D. Johnson (eds.), pp. 196-220. London: James Currey.
- 2009 The Return of Ngundeng's DANG. In *Sudan Studies Society of United Kingdom*.²⁶

川田 順造

- 2004 『アフリカの声：〈歴史〉への問い直し』青土社。

栗田 貞子

- 2001 『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店。

栗本 英世

- 1999 『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店。

Lan, David

- 1985 *Guns and Rain: Guerrillas and Spirit Mediums in Zimbabwe*. London: University of California Press.

Lienhardt, Godfrey

- 1961 *Divinity and Experience: The Religion of the Dinka*. Oxford: Clarendon Press.

Middleton, John

- 1960 *Lugbara Religion: Ritual and Authority among an East African People*.

²⁶ 筆者は、D.ジョンソンが岡崎彰教授に送付した原稿を入手した。

London: Oxford University Press.

長島 信弘

1978 「解説」『ヌアー族－ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』向井元子(訳)、pp. 413-429、岩波書店。

縄田 浩志

2007 「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし—写真〈ハゲワシと少女〉撮影時の状況を探る—」『アフリカ』池谷和信, 佐藤廉也, 武内進一 (編)、pp. 333-349、朝倉書店。

インターネットサイト (2010年11月25日最終閲覧)

Sudan Tribune 2009年5月17日記事

<http://www.sudantribune.com/spip.php?article31195>

Sudan Tribune 2009年5月18日記事

<http://www.sudantribune.com/Vice-President-of-S-Sudan-in-fight,31212>

Sudan Tribune 2009年5月21日記事

<http://www.sudantribune.com/Ngundeng-s-family-elders-dismiss,31237>

(2011年5月17日採択決定)